

『この『目』だから見えるモノ』

株式会社イワキ イワキメガネ蒲田店

合田 映理子

朝起きると目に入る、くもりガラスを通したようなぼやけた景色が大嫌いでした。自分の目が大嫌いでした。私が眼鏡をかけるようになったのは、小学生の頃。

私にとって「目が悪いこと」は、恥ずかしくて悲しくてたまらないことでした。眼鏡を掛けないければ、外を歩くことはもちろん家で本を読むことも難しく、もっと目が良かったなら、と考えては落ち込む毎日。そんなコンプレックスである「目」と向き合わざるを得ない眼鏡店は、あまり行きたくない場所でした。

それにも関わらず眼鏡の販売という仕事に就いたのは、同じような悩みを抱えている人の気持ちに寄り添うことが出来るのではないかと考えたからです。

眼鏡店には、誰もが楽しい気持ちで訪れるわけではありません。中には、憂鬱さを抱えながら来店される方もいます。「度数が強いから、レンズが厚く目立ってしまう」「あまり眼鏡を掛けたくないけれど、コンタクトレンズが使えなくなってしまった」「最近、手元が見え辛くなってきた」……等々、メガネを作る理由や悩みは人それぞれ。

少しでも視環境が良くなるような提案をしたい。そうは思うものの、どう頑張っても他者の視界を私が体験することはできません。しかし、想像をすることはできます。特に、自分と同じくらいの度数の方であれば、より具体的に。

「眼鏡を外したら、何も見えなくて……」、その言葉に、「私もそうなんです」と返した時に、ああ、この言葉を言えてよかった。そう思いました。この目だからわかること。この目だから共感できること。お客様の雰囲気少し和らいで、安心した様に笑ってくださった時、相手に寄り添うことが出来たのかもしれない、と嬉しくなりました。そして、出来上がった眼鏡をかけて、「良く見える」と喜んでいただく度に、自分の視界に対する憂鬱が解けていくように感じました。

勿論、他人の「見え方」を理解するのは難しく、中には想像すら難しい場合もあり、日々反省することばかりです。それでも、相手の気持ちに寄り添う姿勢は、いつも忘れないようにしたいと思っています。そうすることで、朝起きた時のぼやけた景色もそれほど悪くないと、受け入れられる気がするのです。